

□ 葛飾防災情報システム

葛飾区堀切二丁目西町会 「市民・防災・葛飾」 松原 康之  
<<http://www.matsubara.com/bousai>>

1995年1月17日、朝、いつものようにテレビのスイッチを入れる。画面に映し出されたものは煙が立ちのぼる神戸の町の風景であった。

「何があったんだ?」

これが阪神淡路大震災である。

眠気も吹っ飛び、早速電話を回して見る。

「現在、この地域への電話は大変込み合っています。改めておかけ直し下さい」とテープの音。

私の妻の実家は神戸市長田区にある。テレビを見ながら何度となく繰り返し電話をかける。一向に通じない。時間が経つにつれ、具体的な状況が次から次へと流れてくる。しかし、長田区の様子は入ってこない。

私はマスコミ関係の仕事をしている。情報が入って来ないのは相当の被害を受けていると想像できた。

「もう、生きてないよ!」と女房。昼頃、菅原市場からの出火が報道された時には、私も「ダメか」と思った。

「あの商店街って細いアーケードだし、火がついたらおしまいだよね。」実は、義母は住まいと別に市場内に店があったのだ。

テレビを見ながらの電話、何度繰り返したか覚えていない。

長田区は私の住む葛飾に地域特性や下町風情がとても似ている。

午後6時近くに電話が鳴り「みんな無事だから!」義兄からの一報であった。

「よかった…」

後から聞いた話だが、地震が起きた直後、家から逃げ出せたものの、家の前に座り込み放心状態。少し時間が経ち、近所の人達と学校へ向かったそうである。少し落ち着き、夕方になり義兄が様子を見に実家に戻ったところ、瓦礫の中から電話を発見。

怖々受話器を耳にあてたところ「ツー」と発信音。あのような震災時にも被災地内の電話は通じていたのである。

震災直後の実家付近では自主的な防災活動など全く行われず、誰も自分たちの事で精一杯。義兄も電話を見るまでは、私たちの事すら忘れていたそうだ。実際に大きな地震に遭遇したら、人々はこの様な行動しか取れないのかも知れない。

1~2カ月後私は神戸の町を訪ねた。ニュース映像を見ている限り、瓦礫と化した焼

け野原の壊滅的な町を想像していたが、所々壊れた家やブルーシートの屋根、焼け残った家屋が目につくものの、町並みは残り、不謹慎ではあるが以外であった。

昼夜を問わずのニュース報道は、あくまで被災地の外への情報発信が中心で、私もそれを見ていた一人である。しかし、被災地における必要な情報発信の場は、当時あったのだろうか。また、行政機関も速やかに情報を集め、それを有効に利用し、活動が行われたか疑問が残る。

災害時の情報には、被災地で有効利用できる情報と被災地外の第三者に報道する情報と分ける必要がある。被災者にとり必要な情報は、自分たちに関係する密接な情報であり、また、被災地に関する行政機関も正確な情報収集と、その情報を迅速に処理する事により、効果的な救援活動が可能となる。

私の町は阪神淡路大震災以来、防災活動に力を注いできた。他自治町会が救助資器材を買い揃え、ハード面を充実させるのに対し、わが町は「逃げるのは最後の手段!自分の町は自分で守ろう!」を合い言葉に、災害時の町の方針や町の指揮権・住民の安否確認・早期火災箇所発見・住民との連絡方法などの、ソフト面に力を入れ、それに基づき資器材を揃え、現在では、住民にも防災に対する認識が浸透し、東京で一番の防災町会に成長したと自負している。

ただ、活動を続けていくに従い「自分の町さえ守れば安全なのか!」という疑問にぶつかる。細い道一本隔てれば、隣の自治町会である。私の町が自信を持って防災に強い町と公言しても、隣接地域から被害を受ける

事は十分に考えられる。また、自然災害である以上、自分の町が「絶対安全」とも言えない。要するに防災に「絶対」は有り得ない事に気付いた。

災害時に必要な事は住民の協力と隣接地域との連携であろう。ただ、住民との協力や隣町との連携は、ある程度、日頃より取れるものの、その先の町の事になると情報収集の方法もなく、非常に難しい。

そこで考えたのが「葛飾防災情報システム」である。このシステムは、インターネットを使った地域の情報掲示板だと思って頂ければ理解しやすい。

被災現場で自主防災活動を行う場合、必要な情報は、テレビやラジオからの全体的な情報では無く、近隣の火災・倒壊・避難場所・負傷者搬送先の病院情報である。そして、時間が経つにつれ、情報内容も延焼や避難所・支援要請と変わってくる。行政サイドも同様な情報を必要とする。それらの情報を双方向通信により円滑に行う事を目的に作ったモノがこのシステムである。

双方向というと電話や無線・伝令などが一般的であるが、いずれの手段も一対一の通信のため、情報の集約性に欠けるのである。例えば、同時多発的な災害の場合、消防署や警察署、または、役所に個人として連絡を取る方法しかない。一つの火災をその近所の人達がそれぞれの機関に電話をすれば、それ等は重複情報である。

通常の事故や事件なら問題なく処理されるが、広域災害には行政機関に何回線もの電話があろうと、1日に受けられる通話数が計算でき、回線は一気にパンクする。

その点、インターネットを使った掲示板

は、一つの情報を様々な人々が共有できるメリットがある。インターネットは、アメリカが核戦争を想定し、情報の分散化や情報の収集用に作られたシステムである。このシステムは、地震等の広域災害時に大変有効と思われる。

世界中に張りめぐらされた電話回線を利用し、サーバー(情報ボックス)内の情報を誰しも得る事が出来る。ちなみに「葛飾防災情報システム」のサーバーは安全性を考え米国に設置してある。(東京で大きな地震が起きた場合サーバー自体が破損する可能性がある)

災害情報掲示板は、阪神淡路大震災以後に、インターネット上に様々な形でできあがってきた。どの掲示板を見ても個人の書き込みよるモノが多く、被災地から第三者(被害を受けない地域)への発信や第三者同士の連絡用に使われる形であり、被災者にとり有効的な掲示板か疑問である。確かに時間が経つにつれ、ボランティアを集めたり、救援物資の要求等には利用度が高い。

「葛飾防災情報システム」は他の掲示板と全く考え方が違うのである。全体情報を必要とせず地域情報に限っている。また、書き込める単位を各自治町会と、その地域を担当している行政機関に限定している。

誰もが自由に書き込める訳ではない。

私の住む葛飾区の場合、区の中を19地域に分け、各地域ごとに出張所がある。(現在、予算削減に伴い、出張所の数は大幅に減ったが地域区分は変わっていない)情報収集を行いたい者は、その地域の情報掲示板をモニタリングさえしていれば、刻々と変わる状況を把握でき、機能的な活動計画が立

てられる。

例えば消防や警察関係では、署内のモニター上で各自治町会が書き込む火災・倒壊情報等を署内の地図上にマーキングしていく事により、消火・救助隊の投入計画や優先順位が速やかに立てられる。区役所も、各町の被害状況を整理し、支援計画に入れる訳である。

「個人書き込みの禁止」についてだが、個々に許すと、重要な情報・不必要な情報と様々で重複情報も多くなり、すぐに掲示板画面が情報の山と化すからである。これでは本当に情報を必要としている者にとり迷惑である。

実際の使い方は、自分の町の災害情報(出火・倒壊・負傷者・不明者等)を一度整理し各自治町会として、自分の地域の掲示板に書き込む。その事により正確な情報が掲示されるのである。

また、行政サイドは「支援に向かう」や「現状での支援は無理」などと客観的に書き込む事により、互いに繋がっていると感じ、孤立感のある地域や住民に安堵感が生まれるのである。広域災害時には、行政機関の支援を待っていても、なかなか救援隊は来ない事が想像でき、時間経過に伴い被害が増大していく。このシステムを有効に活用すれば、行政による救援活動が始まる前に、被害の少なかった町は、近隣の被害の多い町へ支援協力も可能ある。この事が一番大事な点であろう。

「葛飾防災情報システム」は、個人等の書き込みを禁止しているが、誰もが自由に見る事はできる。情報は包み隠さず、客観情報をつぶさに発表する事により、生きた情報

になる。

「葛飾防災情報システム」は、信頼できる情報掲示のために、いくつかの機能も付加している。時間ごとに刻々と変化していく情報を5分ごとに自動的に更新し、掲示し続ける機能や、偽情報を防止する機能である。災害時にも、偽情報を書き込む心なき人がある。それ等を防ぐために、自治町会名と代表者名を入れなくては掲示できない。仮に自治町会名と代表者名で偽情報を掲示しても、このシステムの特徴である地域の細分化(最低一つの地域は10自治町会ぐらいで構成)と自治町会としての掲示方法を取っているため、偽情報をすぐに打ち消す事ができる。行政機関として書き込む場合も、パスワードがなければ発信できない。また掲示される発信者名の文字色(赤)が行政・各自治町会は文字色(緑)と変えてあり、一目で偽情報を見破る事ができる。

疑わしき情報を確認するために、バックグラウンドで行政関係者より発信者に対し確認メールを送る事ができ、その他に、区の全体情報を別画面で表示できる機能も備えている。

インターネットは現在一般化され、設備が一つも無い地域はあり得ないと言えよう。その事により、情報ネットワークを費用をかけず速やかに構築できる利点がある。だが一方、災害時の電話回線や電力供給の問題も残されている。

「葛飾防災情報システム」は簡単なシステムであるが、運用するには大変難しい事に気付くであろう。要するに、各自治町会自体が町の情報を日頃より集約できる能力がなければ、このシステムを有効に利用でき

ないのである。当初、災害情報のソフトとして作ったが、運用時には単なるハードウェアに変わるのである。私たち日常の防災活動そのものがソフトウェアになるからである。

昨年の9月、東京では、「東京ビッグレスキュー」という大々的な行政間連携の防災訓練が行われた。これはこれで意味があるのだが、どんなにたくさんの救助隊が来てくれても、被災地の情報が乏しければ、阪神大震災の教訓は生かせないのである。

誤解されては困るのだが、「葛飾防災情報システム」は情報連絡手段の一つに過ぎない。現在「市民・防災・葛飾」という個人のホームページ内に私的に設置されている。このシステムは3~4年程前に、葛飾区役所に対しデモンストレーション用に作成したものである。パイロット版のため、災害が起きた場合、大量の情報処理ができるかは疑問がある。本来は、このシステムを信頼できる行政機関に運営して頂き、内容や機能をもっと充実させ、葛飾区だけではなく、全ての市町村に設置できればと希望している。

残念ながら、いまだ葛飾区のホームページには、このような掲示板は見あたらない。